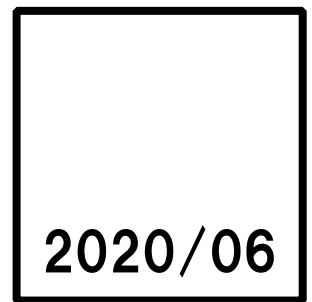




神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。



新型コロナウイルスの世界的な感染は、

大正7年（1918年）から大正9年（1920年）に多くの死者を出したスペイン風邪（インフルエンザのパンデミック。スペイン風邪の名称は、第一次世界大戦に参戦していないため、報道が比較的自由だったスペインで流行が報じられたことによる）と比較されることがよくあります。

その時、企業がどのような対策をとってきたのかを社史で調べてみたいと思いましたが。ただし、一つの業種を除き、あまり記載を見つけられません。その業種については次ページで説明するとして、まず、それ以外の業種のいくつかの社史に散見す

るスペイン風邪の記述を紹介します。

『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（1991年刊）の「スペイン風邪の猛威」の項によると、日本での死者数は二十四万人を超えたそうです（死亡者数は各社史によって異なります、以下同）。

「関係機関の必死の防疫、予防注射もほとんど無力だった。」といい、「口覆器（マスク）の効果信ぜられ、新聞広告にもマスクが登場した。」とあります。社史には、スペイン風邪で亡くなった主な知名士も記されています。

名古屋の製薬メーカー・荒川長太郎合名

会社（社名は刊行時、以下同）の『荒川百三十年』（1982年刊）にも、スペイン風邪の流行が書かれています。当時、頭痛がする人は、梅干しやメンタ（はっか）をこめかみに貼ったりしていたそうです。東京では抹茶を原料とした頭痛薬も売られていました。

同社では、馴染みが薄かった洋薬による頭痛の処方薬「ノーシン」を開発しました。薬効は信用ある医師に証明してもらいましたが。名古屋を中心とした各地で売れたそうです。東京や大阪では地味な包装であったため、なかなか相手にされなかったそうです。

社史にはノーシン錠剤の袋や、「づつうにすぎく ノーシン」と書かれた大正7年の看板の図版も掲載されています。

（裏面に続く）

スペイン風邪の大流行

(表面から続く)

佐賀県に本社を置く久光製菓の『百四十五年史』(1992年刊)には、同社の「朝日万金膏」という膏薬(こうやく)／皮膚に塗ったり、貼り付けて使う薬)が、筋肉痛や関節痛を伴うスペイン風邪の流行に伴い爆発的に売れた経緯が書かれています。この膏薬の主剤は、胡麻油と四酸化三鉛(別名、四三酸化鉛)を混合させた脂肪酸鉛で、和紙に薄く塗って作られました。社史には、気温の低い時期でないとうまく製造できなかったことや、多くの需要に対応するため、社員は午前三時に出勤し、食事の時間だけ家に帰り、時には深夜十二時まで働いたと記されています。また、この時の販売ルートで信頼を獲得し「後の「サロンパス」への途を拓いていく。」とも書かれています。朝日万金膏だけでなく、同社の製造するキニーネを主薬とする風邪薬「赤龍丸」なども製造が追いつかないほどの需要増となったそうです。

さて、冒頭で触れた、スペイン風邪について多くの記載がある業種は何かというと、生命保険会社です。

『第一生命100年の歩み』(2002年刊)には「スペイン風邪と関東大震災」という項目が立てられ、「このスペイン風邪の患者は都市居住者を中心に続出し、都市部を主要なマーケットとしていた当社への影響は特に大きく、大正7、8年度の死亡保険金支払件数のうち、このスペイン風邪によるものが約四分の一を占め、予定死亡数を上回ってしまった。このため大正8年度の決算では剰余金が大幅に減少した。」とあり、新聞社提供のマスクをした女学生の写真や、「手当が早ければ直ぐ治る」と書かれたポスターの図

版も掲載されています。また、『第一生命八十五年史』(1987年刊)にも「この流行性感冒は当時成金感冒とも言われ、都市居住者を中心に罹患者が続出したため、その層を主たる市場対象としていたわが社にとっては、特に影響がはなはだしかった。」と記されていました。

『朝日生命百年史』(1990年刊)にも「流行性感冒と関東大震災の影響」という項目があり、「流行性感冒による被保険者死亡数」「実際死亡数の予定死亡数100に対する比較」「予定死亡数と実際死亡数との差額(金額)」の表を掲げ、主要各社との比較や分析をしています。

『安田生命百年史』(1980年刊)には、生命保険協会協会の調査として「とくに患者や死亡者は、比較的若年層、壮年層が多く、生命保険加入後の経過年数も短かったため、各社の打撃はきわめて大きかった。」とし、「各社とも日露戦争や後述する関東大震災をはるかに上回る損害をこうむった。」と記されていました。

『第百生命70年史』(1985年刊)によると、スペイン風邪に対する生命保険会社の対応は二通りに分かれ「一方は、この大量支払いを宣伝材料として大募集を試み、やがて訪れるであろう不景気に備えようとするものであり、もう一方は、新契約の募集を中止して支払いを極力おさえようとするものであった。」と書かれています。

今回の新型コロナウイルスの影響や感染防止対策は、百年後の社史にどのように記録されるのでしょうか。

(企画情報課 高田)

●お問合せ先 神奈川県立川崎図書館 企画情報課●

〒213-0012 川崎市高津区坂戸3-2-1 かながわサイエンスパーク 西棟2F

電話：044-299-7826 FAX：044-322-8878

<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>